

此日、よき親睦の交はされた事を誰も喜んで別れたのであつたが、唯一つ遺憾なのは、研究、希望の充ち満ちてゐる若き姉妹方の一言をも聞き得ないことであつた。言ふべき機会を與へられ、言ふべき多くを持ちながら、躊躇するのは現代人の爲すべき事ではない。それでは「進へば立て」といふが、折角復興の東京市保育會、起つどころか進ふことさへもおぼつかない營養不良に陥つてしまふ。(記事脱線の罪を謝す)

なほ同會は本年度事業の第一歩として、來る二月十七日午後三時より番町尋常小學校に於て、最近歐洲に於ける幼稚園事業に就て研究調査を終へて歸朝せられた、小林宗一君のダニクコースリトミックの講演と實演を催す事になつた。

(附、二一五)

# 「兼 ち ゃ ん」

東京女子高等師範學校教授

岡 田 美 津

## 第三 お茶の會

田村一家は「原田の叔母さん」の家へ、お茶に招かれて行く途甲だつた。心配氣なお芳は、叔母さんのうちへ行つての行儀について、兼ちゃんにいつてきかせてゐるところだつた。

「あのね、兼ちやんや、母ちやんを困らせるんぢやないよ。原田の叔母さんは、ほんとに上品がつてる人で、ちぎに氣を悪くするからね。」

「全くだ！」と吉藏は引取つて「今日のはな、行儀よくするんだぞ。」

「全くだ！」と兼公が眞似した。

「そんな事、言ふもんぢやないつて、母ちやんはいくども、いくども、お前にいつたぢやないか。」と母親がたしなめた。

「あたゐ忘れたんだよ。」

「そんな事いつてるところを、原田さんが聞かうもんなら、叔母さんは怒つてしまふよ。それからお前さんもね。」吉藏の方を向いて「この子の前で何か言ふ時には、少し氣を付けて下さいよ。この子は鸚鵡みたように口眞似をするから。」

「全くだ！ 氣を付けようよ。」と、吉藏は大眞面目に答へた。お芳は眉をひそめたり、微笑んだりして、

「困つた人だね。」と言つた。

「原田の叔母さんどこにお饅頭ある？」と兼公が尋ねた。

「何があるか行つて見れば分るよ。」とお芳は言つた。「それからね、いゝかへ兼ちやん、パンを二片糶食べてからでなくては、ジャムをおくれなんていふんぢやないよ。そんな事は行儀のわるいことなんだよ。そして叔母さんは、やかましやだから。……それから袖口で口のはたを拭いちやいけななんだよ。いゝかへ。ハンケチを出して一寸口のとこをなでるよりにするの。……それからね、お茶をこぼしたり、飲んだあとにのこつてるお砂糖を吸んだり、ないでね……。それから何か下へ落しても、こゝんで拾はないの。食べてしまつたようなふりをしてゐるの。……それから……」

「いろんな事を考へ出すなあ、えお芳。」と吉藏が口を出した。

「だつてお前さん、兼公にいつてきかせて置かないと、私が困るやうな事をこの子はするもの。男ならなんでもないんだ

らうが女つてものは、義理の姉の前で恥を掻きたくないと思ふからね。それから、お前さんも氣をつけておくれよ。冗談をいふ前に考へてね。姉さんは上品がつてゐて、ぢきに腹を立つから。」

「でも、お前の兄貴は可笑しい話が好きだぜ。」

「それあ、兄さんは氣のよい人さ。でもやつぱり大聲で笑はせろような事はいはないがいよ。それから兼公が生意氣な事をいつても、お前さん笑つちやいけないよ。」

「よし〜。」と吉藏は機嫌よく請け合つて「お前は、おれの事まで案じてゐるんだな。と兼公と同等か。」

「馬鹿な事おいひでない。お前さんがわるいなんているんぢやないよ。たゞね、時々お前さんが忘れて……。」

と話してゐると兼公が原田の叔母さんの家が見えると大聲を出した。

吉藏は新聞の割いたのを煙管たばこに填めながら、

「うん、こゝろか三つ目の塀がそうだ。」といつて、カラを引張つたりネクタイを緊くしたり、帽子を片目隠しといふ風に曲げて被つたり、お芳に目くぼせしたり千代坊をあやしたりした。塀の内へ入りながら、

「おら……入るより自宅うちへ歸つた方が好きな位だ。」と吉藏が言ひ出した。

「何だね！お前さん、原田の姉さんはちやんとした人だし……それに……それにそう長く居ないでもいゝんだから。ちよいと兼公の頭髮かみをもすこし立つやうにしておやりよ。髪が寝てゐるのはよくない。……さ、お前さん、行つて案内のベルを鳴らしておくんない。いゝかへ、戸内うちへ入らないうちに奥さんは御在宅ですかつていふんですよ。」

「だつてお前、留守になるんならおれ達をお茶に招ぶ事はないだらうぢやないか。」

「困るね、この人はちいさい女中が居るから、奥さんはお在宅ですかと女中にきくんだよ。いゝかへ。よいお天氣ですの、なんだのつて言ふんぢやないよ。だゞ奥さんお在宅ですかといふの。分つた？」

「ま、ま、何でもいゝいふ。通りにするよ。」と言ひく吉藏はベルを鳴らした。そして小聲で、

「在宅にゐるようだぜ。誰かに怒鳴つてらあ。」

「シーシー！ 私の言つたようにすればいゝんだよ。」

玄關の戸が明いたので吉藏は極まり悪るさうに、教はつた通りを述べた。

「どうぞお入り下さい。」と小さいな頬の紅い、頭だけは大人風に結つてゐるがまだ子供の服装をしてる女中がいつた。

「足を拭いて、足を拭いて。」とお芳は大きな囁き聲で兼公に注意した。「よく裏を拭くの。」

兼公は力一杯に靴を拭いて、一同のあとから次の間へはいつていつた。そして、

「お父ちゃん。あれより、もつといゝ時計がうちにあるね。」と隅にある置時計を指してかすれ聲で話した。

「黙つて！」と母親は氣を揉んで叱つた。

「母ちゃん。帽子、あたいかくしに入れとくの。」と兼公が尋ねた。

「そうぢやない。お前さん。この子のお前さんの帽子の傍へ置いといて下さい。」

そこへ原田の妻君が出て来て挨拶をし、一同を客間へ案内した。そこにはお茶の支度が出来てゐた。原田のうちは、この頃その雜貨店が繁昌するので、金まはりがよくなり妻君は質朴な親戚達を見下し、その言葉遣や行儀を下品がるのだが妻君の行儀の方がいやに氣取つたところがあつてその言葉と來たら知つたふりの妙なものだつた。

一同爐の前に座を占めると妻君は

「兼ちゃん、丈夫でゐるか。」と尋ねた。

兼公は食卓の上の御馳走を眺めく、

「あたい、丈夫なの。」と答へた。

「丈夫でそのあとは？」と叔母さんが尋ねた。

「丈夫です、御かげさまでといふんだよ。」と母親が腕で突きながら囁いた。

「丈夫です、御かげ様で、」と兼公は従順しくいつて「あたゝい動物園にいつたよ。」と言つた。

「オヤさうかい。そして何を見たの？」

「いろんな動物を見たの、御かけ様で。」と兼公は答へた。

「兄さんは如何です。」とお芳は少し狼狽て、訊いた。

「宅はおかげで達者で居ますがね、今日はあいにく店が明けられないからつて。店の男がきのふ電車に轢かれてね。」

「あゝあの電車！」とお芳はいつて「私も兼公が轢かれて片足なくして歸へつて来やしないかと始終心配でなりませんよ。」

「店の男は腦のシントンを起したのですよ。」と妻君は眞顔で「卵を一ダースと鹽豚肉を一斤よそへ持つてく途中にそんな目に遇つたんですよ。」

「まあ、何ていふ事でせう。」とお芳はいつて「そして卵はみんな破れましたか。」

「二つ助かつたきり。」

妻君はなほもその不慮の出来事を委しく話してゐると吉藏と兼公とは窓から外を眺め、匍はせて獨り遊びをさせておいた千代ちゃん原田の妻君が編みかけにしておいた靴下を籠の中から持ち出してズル／＼ほぐして楽しんでゐた。

やがて紅頬の女中が茶瓶を持つてはいつて來た。一同は食卓のそれ／＼の席に着き、千代ちゃんは母親の膝に抱かれて、ナイフに觸つてはいけなさと教へられた。

原田の妻君は吉藏をじつと視て、

「吉藏さん、どうぞ、お祈りをなすつて下さい。」と言つた。

吉藏は顔を眞赤にして何かわからぬ事をくどくいつて、それが終ると額の汗を拭いて鼻を音高くかんだ。妻君はありがたくないお祈りだと思つたやうな顔を一寸したが、すぐ主人役を勤めだした。

兼ちゃん、叔母さんが耳附きの杯に牛乳と熱湯とを入れてるを見て、

母ちゃん。あたゝい牛乳いらぬよ。」といつた。

「あれは千代坊のだよ。」だげど、何でもくれるものを貰ふのだよ。」とお芳は囁いた。

始め五分間程談話が途切れてしまつたが、やがて原田の妻君が

「吉藏さん、この冬はちよい／＼よそへお出掛けですか。」と氣取つていひ出した。

吉藏は口をあいて呆れ顔をした。

「いや、お蔭で正月以來一日も仕事にはぐれた事ありませんや。」

「宴會だの園遊會だつていふようなものへといふ事なんです。」と妻君は苦笑した。

「あ、さうですか。イヤお芳も私も家に居るのが好きでね、……ま、動物園へいつたり寄席へいつたり二三度「夜の會」に行つた位さ。」

「あたゝい夜の會好きだよ。」と兼ちゃん、はジヤムの壺へ匙を突込みながらいつた。この子はバタつきパンの片を二つまで下へおとしてしまつたのだが感心にも母の言ひ付けを記憶してゐて拾ひ上げやうともしなかつた。

「ほんとに、兼公こそ夜の會ぢや盛なものだね。こないだも蜜柑を四つ、菓子なんか數へきれぬ程やらかしたんです。」と吉藏が話した。

「そのお蔭であくる朝油薬を飲まされてね。」とお芳は千代坊に食べさせるのを商賣のようにしながらいつた。

「お前、油ぐすり好きかへ。」と原田の妻君は苦笑ひしながら尋ねた。

兼ちゃんは口一杯頬張りながら、

「ムーン、叔母ちゃん好きかい。」と言ひ返した。

「何をいふんです。」とお芳は叱つた。

原田の妻君は少しどぎまぎしながら、

「ビスケットを一ついかゞ。吉藏さん。お茶を注ぎませう。お芳さんお茶碗がからでせう。」

「ハイ、ありがたう。之は大層結構なお菓子ですね。」とお芳がいふと、

「それはね、黒木つていふお医者さんの奥さんから教はつたのです。黒木の奥さんは、御親類がみんな高貴で、中々キドク的のおうちなんです。私やお心安く願つてゐましてね、こんどの月曜日にも、ある會で御遇ひ申すつもり……よい方ばかりの集りでして……あの方と私と……」

「お父ちゃん、あたい御饅頭が欲しい。」

「いけませんよ。一つ食べたんだから。」とお芳がいつた。

「もう二つ欲しいんだよ、母ちゃん。」

「いけません、……それで今のお話のつゞきは。」

「今申す通り……」

「お父ちゃん、ぶどう入りのお菓子おくれ。」と兼公が小聲でいつた。

吉藏は兼公に眼くばせして、自分の方へそろり／＼とその菓子の入れ物を見つぱり寄せやうとした。

妻君同志は、こんどのその集りの談話に夢中になつて目前の事には頓着なしの風だつた。菓子鉢がだん／＼そばへ來て

兼公はそつと手を伸した。ぶどう菓子一つせしめて手を引込めやうとするとその途端に母親が見付けて、

「兼ちゃん！」と怒鳴つた。

不運の兼ちゃんはハツとした。その拍子にジャムの壺がひっくりかへりジャムがテーブル掛の上に流れ擴がつた。兼ちゃんの茶碗もひっくりかへつて床に落ちて粉微塵に碎けた。千代ちゃんは何か面白い餘興を自分もしなければならぬと動違ひをして、キャツ／＼と聲を立て、牛乳の杯を兼ちゃんの茶碗のあとから轉ばした。すると父親が大狼狽で起ち上つた拍子に皿とビスケツト五個をひきづり落していよいよ損害を大きくした。

吉藏は途方にくれてつツ立つて居ると、お芳は口もきけなくなり顔色も蒼くなつてしまつてゐた。千代ちゃんは冗談やぢないのだと解つたかして、ワア／＼啼き出した。

兼ちゃんは唇を慄はし眼に涙を一杯溜めて、自分の仕出來した不始末をじつと眺めてゐた。誰も原因の叔母さんの顔を見るものがなかつたが……その顔は恐ろし……實際恐ろしかつた。叔母さんが口をきいた時は……言語數が少なく刃物で切るやうな感があつた。その言語は子供の育て方についてと自分は子供のないのを心から有難がつてゐるとの意味であつた。可哀さうにお芳は兼公に代つて詫び、實に申譯がないといひ自宅へ歸つたら懲らしますと述べた。お茶がすんでから一時間は居心地のいゝものであつたから、吉藏は原田の家を出ると思はず安堵の様子を見せた。

「もう、お茶に招ぶまいな。」とかれはいつた。

お芳は黙つてゐた。

「兼公がごめんなさいつてあやまつてるぜ。」とやがて吉藏がいつた。

「さうだららともさ。」とお芳は呟いた。

「油薬を飲まなくつていけなければ飲むとよ。」とまた吉藏がいつた。



「油ぐすり位ぢやすまないよ。」

「だつてお前、あの子がわるいんでもないよ。つい出来てしまつたんぢやないか。今日は勘辨してやれよ、エお芳。おれも皿を一枚破した千代坊も杯をこはしたんぢやないか。おれ達も油薬を飲んでおまけにもつと何かされるんかい。」

「お前さんは、そうやつて私を説き伏せるんだね。」と言つて此事件は無事に納まつてしまつた。

十分程すると吉藏は兼公が後れて歩いてるのに気がついた。それで二三歩後戻りして悴の手を曳いてやりながら、

「兼公、お前口んなかへ何か入れてるんだ。」と急に尋ねた。

兼公はかくしから何か取出した。

「お父ちゃん、少しあげよう。ぶどう入りのお菓子だよ。」と應揚にいつた。(つゞく)